

令和元年度第1回前近代小部会議事録

日 時:令和2(2020)年3月12日(木)14:55~15:50

場 所:北海道庁本庁舎5階 法規審査室

参加者:谷本小部会長、越田委員、中田委員、松本
委員

事務局(鶴原・中谷)

1 開 会

2 議 事

- (1) 自己紹介
- (2) これまでの経過と刊行計画について
- (3) 委員の分担と今後のスケジュールについて

3 閉 会

1 開 会

【靄原室長】

- ・本日はこのような状況の中でお集まりいただきありがとうございます。今回は、概説部会の中で前近代小部会と近現代小部会の2つに分かれて開催する初めての小部会。今まで概説部会の中では、誌名や形態といった、どういう体裁にするかという大枠の議論をしてきたが、具体的な中身については、これから小部会に分かれて活動していただくことが中心になると思うので、よろしくをお願いします。

【谷本小部会長】

- ・皆様今日はお忙しい中、またこういう状況の中、足をお運びいただきありがとうございました。今、靄原室長からありましたとおり、概説部会の中の小部会に前近代と近現代とがあり、前近代は基本的に江戸時代までで、近現代は明治以降。厳密にこの日からということではないが、基本的にはそういう認識で2つの小部会に分かれている。
- ・今日は何かを決めるということではないが、皆様にお引き受けいただいてから初めての、いわゆるキックオフとして、お互いに認識を共有して行ければと思う。

2 議 事

(1) 自己紹介

【谷本小部会長】

- ・出席者名簿の先生方のお名前の備考欄に、ごくおおざっぱではあるが、先生方のお仕事の時代を書かせていただいた。どういうお仕事をされておられるか、知っているようで知らないことも多いと思うので、事務局も含め自己紹介をお願いしたい。
- ・私は、北海道大学の文学部で日本史を担当しており、北海道の江戸時代、文献史学の近世を専門に研究している。概説部会の専門委員のため、まとめ役である小部会長をせよということで、総括と書かせていただいた。よろしくをお願いします。
- ・川上先生は、今日のご事情によりご欠席。考古にもご経験のある先生だけでも、現在のご専門である中世や近世をご担当いただけると期待している。

【越田委員】

- ・私は札幌国際大学の縄文世界遺産研究室の室長をやっている。世界遺産への取り組みをしているが、私自身は特に縄文を専門にしているわけではなく、どちらかというと中・近世頃の北海道アイヌ文化期とか、中世の館（たて）の時期が専門。全般的に考古学をやってきており、そちらの方が中心になっていくかと思う。よろしくをお願いします。

【谷本小部会長】

- ・蓑島先生も今日のご事情によりご欠席です。蓑島先生は、古代・中世と書かせていただいたが、ご専門は文献史学、その中でも古代史がご専門で、北海道・東北地方の蝦夷（えみし）などを研究されておられる。一方で考古学の情報などにも大変造詣が深く、総合的に分担いただけるのではと期待している。

【中田委員】

- ・教育庁文化財・博物館課の中田と申します。私は教育庁の人間ですが、環境生活

部の縄文世界遺産推進室に併任ということで、今は縄文遺跡群を世界遺産に登録することも仕事にしている。専門は縄文ではなく考古の擦文で、考古の中でもどちらかというと新しい方を中心にしており、そういったことでお手伝いできればと思う。よろしくお願いします。

【松本委員】

- ・藤女子大学の松本と申します。私の専門は近世史で、文献資料をもとに近世蝦夷地について勉強している。よろしくお願いします。

【靄原室長】

- ・道史編さん室長の靄原です。よろしくお願いいたします。

【中谷主幹】

- ・道史編さん室主幹の中谷です。よろしくお願いいたします。

【谷本小部会長】

- ・今ご専門のこともお話いただきましたが、是非ご一緒に良い叙述をしたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

(2) これまでの経過と刊行計画について

【谷本小部会長】

- ・今回は、皆様に初めてお集まりいただいたということで、道史編さん、とりわけ概説部会に関するこれまでの経過と、概説編を中心にした刊行計画について事務局からご説明願います。

【中谷主幹】

- ・経過について、資料1によりご説明します。資料1は部会発足以降の内容に限定しており、その前の有識者懇談会で寄せられた意見などは、皆様へご就任をお願いした時にお渡ししていることから、今日の資料からは省いている。
- ・平成30年7月に開催した第1回概説部会の時点では、所属委員は、桑原委員、平野委員、谷本委員の3名で、委員の追加を議題とし、3名のご推薦をいただいた。
- ・第2回の部会からは、榎本委員、川上委員、葦島委員が加わり、議題の1つ目である概説の体裁については、その場では結論に至らず次の回への持ち越しになった。2つ目の議題の分担については、実際に作業をするときには2つのグループに分けることが望ましいということ、また特に考古分野の委員の参画が必要という結論に至った。
- ・第3回の部会では、概説の編集方針を検討し、トピック型などではなく、通史型を取るという方針を決定した。また、グループ分けの内容を具体化した。
- ・平成31年度第1回の部会では、概説の誌名を、この会の中では『北海道史クロニクル』、その後再度合意を取り直し『北海道クロニクル』とし、また前近代と近現代の2冊とするとの方針を、上部の委員会に提案することになった。また、追加委員の候補6名のご推薦があった。
- ・この部会の後、前近代小部会では越田委員、松本委員、中田委員、近現代小部会では井上委員、大藤委員、西田委員を委嘱・任命して現在に至っている。

- ・続いて刊行計画については、資料2の道史編さん計画、これは昨年の道史編さん委員会で決定したのですが、この中に必要な事項が網羅されているので、この資料に沿ってご説明する。
- ・概説の誌名は『北海道クロニクル』とし、副題を付けるということ、刊行年度は2027年度を予定している。
- ・紙媒体での刊行については上下各巻400頁、A5版並製本で無償分1,400冊、有償分3,000冊で予定しており、またデジタル技術による提供も積極的に行うこととしている。
- ・編さんの方針として、概説については『新北海道史』以降の新たな研究成果を反映させ、考古から現代に至る北海道史を新たな視点でわかりやすく叙述すること、記述中心の通史型にするが、ビジュアル的な要素も取り入れて一般道民が親しみやすい構成とすること、道民が書店等で手軽に購入できるものにする、をあげている。
- ・最後に、資料収集や資料情報の提供には広く道民の協力を求めたり、編さんの進捗状況や調査研究の成果は、ホームページで逐次公開する、あるいは、各巻刊行直後には委員による講演会を実施し、道史に対する興味関心を深めるという方針をあげている。

【靄原室長】

- ・資料3の刊行のスケジュールを説明させていただく。毎年1冊又は2冊ずつ刊行することとしており、最初に現代史の資料編を3冊、次いで現代史の通史編を2冊刊行する。その下の「概説」とある部分を見ていただくと、2022年度以降の分しかないが、あくまでも中心としてやっていく時期であって、その前からそれぞれで蓄積していただくとか、資料調査についても、現代史が優先される時期ではあるが、必要であればその中に概説についての調査を加えることは可能。
- ・資料調査が終わり、2023年度から本格的な執筆をしていただくが、ビジュアルも重視することになっているので、どういう図版を使うかなども結構大きな作業になるのではないかと。その後入稿・校正を経て、2027年度末、つまり2028年の2～3月頃の刊行となる。同じ年に事務局の方で作成する年表も刊行し、それをもって道史編さん事業が終わりとなる。

【谷本小部会長】

- ・資料2でお分かりいただけると思うが、私どもの前近代小部会が担当する概説『北海道クロニクル』（考古～近世）は、道史編さん事業の中で考古から近世を扱う唯一の巻ということになる。近現代編については、戦後分は『北海道現代史』と呼応するような構成になる。
- ・第3の刊行部数を見ていただくと、『北海道現代史』の有償販売は150～200部であるのに対し、概説と年表は3,000部。つまり、一般に頒布することを前提として叙述する必要があるということで、これをお含みいただきながら準備できればと思っている。
- ・ビジュアル重視ということでは、編集業者の方を入れることが必要であろうという話になっている。

- ・『新北海道史』の開拓史観に関しては、いろいろな議論があった。『新北海道史』以降の研究成果を反映するという中には、単に事実関係や研究が深まったというだけではなくて、いわゆる歴史の見方、叙述のされ方、とりわけアイヌ民族史に関する動向、最新の叙述の状況も反映して書かなければいけないと考える。今すぐに叙述の方針を決めるのは難しいが、2023年度から執筆をする前に、私たち執筆陣の中でどういう方針で叙述するかをすり合わせて、方針を共有しておくことが最も重要な作業になる。
- ・記述内容に関しては、考え得る最良、最適な専門の先生方に今回は集まっただけなので私は何の心配もしていないが、どういう叙述方針で統一的に叙述していくのか、これをこれから先生方と対話を重ねながら決めていければと思っている。現在の北海道史の叙述はどうあるべきかを示すことにもなるので、ぜひ先生方のお知恵を拝借させていただき、皆で考えてつくっていくことが、社会的にもたいへん大きな意義を持つ仕事になるだろうと思う。

(3) 委員の分担と今後のスケジュールについて

【谷本小部会長】

- ・今日はこれについて何かを決めるということではないが、先ほど中田委員と越田委員から、縄文のお仕事をされておられるけれども実際にはもう少し後ろの時代がご専門だと伺った。それでも少し越境していただいて、もう少し古い時代からどのように叙述していくのか、曲げてお願いしなければならないと思うが、先生方いかがでしょうか。

【越田委員】

- ・どの程度まで書くかによる。研究となると、今は旧石器や縄文はかなり細分化されているので、そこをどこまでカバーできるかだ。どうしても、つまみ食いするような形になっていくように思う。

【中田委員】

- ・私も最初にお話を伺った時から、縄文と旧石器は専門化、細分化されているところがあるので、できれば古い時代の方でどなたか若手の方でもいらっしゃったらと感じている。

【谷本小部会長】

- ・なるほど。これ以上の協力委員などの追加は考えられるのでしょうか

【靄原室長】

- ・はい。

【谷本小部会長】

- ・あり得るのですね。ただ、方針はしっかり固めてから、こういう方針でお願いしますと依頼した方がいいですね。船頭多くして、となるとなかなか難しいと思うので、是非先生方に人選等も含めてご協力をお願いできればと思います。

【靄原室長】

- ・なぜこの方が必要かという、その理由付けをはっきりさせる形でご推薦いただけると助かります。

【谷本小部会長】

- ・予定していた議事は以上ですが、せっかくお集まりいただいたのでごつくばらんに何かございませんか。

【越田委員】

- ・最初に靄原さんからお聞きしたのは、写真とテーマを小分けにして見開きで順番に辿っていくという案があったと聞いたのですが、やはり記述で通史を書いた方がいいとなったのですか。

【靄原室長】

- ・いろいろな案があったのですが、トピック的な見やすい囲い記事があるにしても、全体としては通史型の記述がいいのではないかという結論になりました。

【谷本小部会長】

- ・通史型でやるべきだと強くおっしゃられた委員の先生方がいらっしゃいました。

【靄原室長】

- ・有識者懇談会の中からの議論では、前回の『新北海道史』と変わっている部分が問題になっているので、そこをきちんと力を入れて書き込むという強弱の付け方はあっていいのではないかと思います。

【越田委員】

- ・ウポポイができると少し方針が決まるのだと思う。いわゆる、アイヌ期という考古学的な名称の取扱いが問題になるのですが、北海道の中・近世にどういう名称を使うのかということはおうちの部会だけで決めなければならないことになりそうですよね。

【谷本小部会長】

- ・そうです。

【越田委員】

- ・年表の中にも入ってこないですね。

【靄原室長】

- ・年表について、基本的には『新北海道史年表』に70年以降の分を補足するということがあったが、考えてみると考古や古代の記載がほとんどないようなものなので、そこに新たに分かったことから何を項目として書き足すかというのも、こちらの部会の先生方にお世話にならないといけない。

【谷本小部会長】

- ・そうすると発刊が同じ年なので、計画的にやった方が良さそうだ。あと2年くらいは余裕があるので、そのあたりは事務局からお示しいただければと思う。

【越田委員】

- ・今明らかなのはアイヌ史をどう扱うかですね。方針をきちんとし、アイヌ協会の人とも話さないといけない。

【谷本小部会長】

- ・そうですね。ウポポイが予定通りオープンできれば、早い段階で皆で一緒に見学した後ディスカッションをするというのは可能ですか。

【靄原室長】

・その場で先生方でお話されるというのはよいですね。

【谷本小部会長】

・そういう中で執筆方針を少しずつ固めていくというのがよいと思う。次に集まるタイミングはそれですね。

【越田委員】

・国の年代の決め方というのは影響が大きく、それに倣うように分けましたというのが楽です。向こうの方とも是非意見交換がしたい。

【谷本小部会長】

・そうですね。国立アイヌ民族博物館ですので、アイヌ史になりますから、北海道史としてどう読み替えていくのかというところが議論になると思う。

【松本委員】

・「クロニクル」なので、やはり時代区分の問題がどうなるか。今伺って、時代区分をどうするかというところも考えなければいけないと思った。

【谷本小部会長】

・おっしゃるとおりで、レットルを付けるかどうかも含めてです。

【中田委員】

・考古の方と文献の方で、ずれがどうしてもあると思うので、意見交換をして方針を固めていったらよいと思う。

【谷本小部会長】

・おっしゃるとおりです。私の方で勝手に考古とか古代と書かせていただいたわけですが、そういうところだと思う。
・前の『新北海道史』は当時、先史という言葉を使って書かれていて、原始時代から有史の時代になっていくという時代区分だった。それはさすがに、もう現在では堪えられないと思う。ではどういう言葉が適切かというところ、そこは皆さんと一緒に考古・文献を含めて考えていくべきだと思う。そういったところを議論する場は意外にないと思うので、是非ここで北海道の歴史をどういう風に表現・叙述していくかを考えていきたい。

【靄原室長】

・資料調査などで行きたい場所や調べたいものについてお考えがあれば、お聞かせ願いたい。何か必要が出たときは編さん室に直接言っていただければ、相手方の所蔵機関なり個人と交渉して出かけて行き職員が写真撮影したりという作業をする。

【越田委員】

・調査に行く場合は勝手に行くのではなくて編さん室を通して行った方がいいわけですね。考古資料の写真を撮るということも可能か。

【靄原室長】

・写真を撮ってきてくれということであれば我々だけで行くし、先生方が直に確認することが必要な場合は先生方と一緒に同行して必要な作業をすることになる。

【越田委員】

・分担を決めるのはいつくらいになるか。

【谷本小部会長】

- ・まずウポポイを見てディスカッションをして方針を固めた後になる。執筆の段階では編目構成が決まっていけないので、20年度、21年度は編目をしっかり固め、どこを誰が執筆するかを当てはめて決めていかなければいけない。そこが一番大変なような気がする。決めてしまえばプロパーの先生ばかりです。例えば、私が大雑把なたたき台をつくって、それを叩いて叩いて鍛えていくという作業を20年度21年度は繰り返していくということでどうでしょうか。

【中田委員】

- ・それでいいと思います。

【谷本小部会長】

- ・先ほど言った専門の編集の方が、そういうものをご覧になっていろいろとアドバイスをいただくタイミングも必要になってくるわけですが、それが22年度でも大丈夫ですか。

【靄原室長】

- ・それはもっと後になるかと思います。

【谷本小部会長】

- ・まずはこういう問題点があることを共有し、先生方にこうしたらいいということを考えていただくブレインストーミングが必要かと思う。ウポポイ開館はよいタイミングなので、4月か5月の早い時期に、今日ご欠席の先生も含めて、この小部会として正式に見学に行つてディスカッションする場の設定をお願いしたい。

【靄原室長】

- ・わかりました。オープン日程を確認して日程調整する。

【谷本小部会長】

- ・サブタイトルは概説部会で考えるものですか。

【靄原室長】

- ・上巻と下巻で、サブタイトルは別であってもいいという話でした。

【谷本小部会長】

- ・であればここで考えなければならないということです。
基本的には、上巻で明治維新まで、あるいは廃藩置県まで、下巻には考古は出てこない。産業考古は少し入るかもしれませんが。

【越田委員】

- ・去年の赤れんが庁舎の発掘調査では、貯水槽が新たに見つかつて、池の方に排水している跡があった。そういうことも新しい知見になる。

【谷本小部会長】

- ・基本的には、古い時代、考古でしか分からない時代は上巻で扱うことになる。

【越田委員】

- ・例えば阿倍比羅夫の話は。

【谷本小部会長】

- ・それも入ります。先ほど中田先生のおっしゃった文献史学と考古ですが、『北海道史』ではそこを完全に分けていて、文献になってからが有史時代。だけれど

もアイヌの歴史があるので「原始（先史）の残滓が続いた」という書き方で書かれていて、繰り返しになるが、そういう叙述では現在は堪えられない。阿倍比羅夫を扱わない訳にはいかないと思うので、そこは一つ一つ検討していきたい。

【越田委員】

- ・細かいことになるが、北海道をどういう風に区分するか、道央部・道東部とか、そういう区分なども、ある程度はじめに用語集のようなものがあつた方がやりやすい。
- ・今まで、例えば考古の擦文文化の時代でいうと、最初は全道に広がっているように書かれていたのが、今分かっている新しい立場では、どの時期にどこまで広がっていくというような書き方ができるようになった。縄文土器でも、土器の広がり方は違うので、一緒に書いてしまうとまるで北海道全部が一緒に動いているようになってしまう。それで地区の名称をどうしていくかということが出てくる。
- ・道央・道南・道東・道北、それをどのあたりで区分しているとか、用語として道で使っているものを示していただきたい。

【靄原室長】

- ・それは関係する部署に確認します。今の振興局の区分がどこに入るという程度だとは思いますが。

【谷本小部会長】

- ・実際に書いていくと、用語の統一というのは確かに必要で、20世紀初頭の「初頭」はいつまでとか、たぶんどこかに基準はあるとは思う。

【越田委員】

- ・東蝦夷地と西蝦夷地の区分の線とか、そういう基本的なものを早めに用意しておくと思えるかと思う。

【谷本小部会長】

- ・現代史の方とも連動しますか。

【靄原室長】

- ・そうですね。今まで全然話題にはなっていませんでしたが。

【谷本小部会長】

- ・例えば旭川を、道北という巻と道央という巻があつてはいけない。

【靄原室長】

- ・結構、やらなければいけないことが出てきますね。20年度21年度で、小部会のご予定としては年に2～3回ですか。

【谷本小部会長】

- ・そうですね。やはり最初が肝心だと思う。

【越田委員】

- ・「時期」を使うか、「時代」を使うかとかいうこともある。

【中田委員】

- ・今の小中高の学校教育の日本史では、どんな風に時代区分をするかとか、わからないところがある。一般向けの有償分があり、あまり専門に走って普通の方が読

んで分からないということがあってはいけないので、そのあたりのことを皆で勉強していけたらと思う。

【谷本小部会長】

- ・そうですね。学習指導要領の改訂で、ちょうど来年度から小学校、再来年度から中学校の教科書記述が変わる境目になる。27年度発刊だと、さらにもう1回変わるのかもしれないが、そこも共有しながら方針は定めていく必要があると思う。

【越田委員】

- ・議事録に、道教委で副読本をつくっているという話が出ていますが、アイヌ史の教科書のことでしょうか。

【谷本小部会長】

- ・今の新しい法律ができるということで、今回指導要領が変わって、アイヌに関してしっかり書くようにと、小中の教科書がかなり変わるはずですが、つまり扱わなければいけない内容の中にアイヌに関する内容が入っていて、小学校は社会科で「アイヌの歴史や文化についても取り扱う」こととされ、中学校では社会の歴史分野で「北方との交易をしていたアイヌについて取り扱うようにすること。その際、アイヌの文化についても触れること」とされています。中学校では小学校に比べ重厚な記述になるはずですが、新年度に教科書の選定をするから再来年度から採用になるはずで、各社がどのようにそれを受け止め、変わるのか、中田委員のおっしゃるとおり把握しておいた方がいいかもしれない。
- ・他に何かございますか。なければ、今日はこういう状況ですので短時間に留めるのがよいと思います。ではこれで、本日の小部会は終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

－ 閉 会 －

(了)